

音声訳を考える

音声訳の難しいところ

音声訳で「なにが一番難しいか」と聞かれれば、「原文をより正しく伝える為に、音声訳者が判断して行う、足したり引いたりする作業（文章を削除したり増やしたりすることではない）」、つまり「処理」が一番難しいと云えるでしょう。これまでの講習会では、①録音をきれいにする録音技術や、②明瞭な発声、アクセント、聞き手によくわかる読みのテクニック、③誤読なくして正確に読む。その為に、読み方のわからない語句を迅速に調査する技術などが取り上げられています。調査の方はインターネットや電子辞書などでかなり素早くわかるようになってきていますが、誤読なく正確に読むのはたいへん難しい作業でもあります。しかし、さらに日本語の場合、原文をそのまま読むと正確に伝わらないことが多々できます。こうした時に、音声訳者が文章をより正確に伝えるために、さまざまに行う処理の講習は、音声訳者のセンスを鍛えるもので、なかなか難しいところでもあります。

例えば、よくあるケースですが、ある文章に、「ママ」というルビが付いていて、音声訳者が「〇〇にママ印」と機械的に読む場合があります。この「ママ」のルビの処理ですが、文章によって、①「ママ」のルビがついていることをコメントしなくてはならない時、②「ママ」がついていることをコメントたうえて、補足説明をする時、③「ママ」を読まない時、の三通りのケースがあります。

③のケースは「ママ」を読まなくても本文の内容が伝わる場合です。つまり、たまたま字が違っていても、音声化したら同じ音になって利用者には伝わる場合で、改めて字の説明までする必要がないと思われるケースです。しかし、文章自体が字が違っていていることを問題にしているような時は②になります。また、説明する時も、本来の字と間違いの字の両方とも説明する必要があります。間違っただけ説明しても意味が通じない場合もあります。

①のケースでは、そのまま読んでも、本来の使われ方と違っていることがわかるような場合で、該当の語句にママのルビが付いていることをコメントするだけでよい場合です。

つまり、読むか読まないか、補足するかしないかなどは音声訳者が本文の内容を考えてその都度判断しなくてはならないということです。このあたりの判断のポイントは、著者がその文章の中でどこまで「書き方」を問題にしているかを考えることが決め手になるでしょう。

第5回

校正のチェックポイント

今回は図・写真などを省略する時のコメントについて書きます。

原本にある図・表・写真など文字以外の情報は専ら視覚にうったえる情報です。これらを音声訳する場合は、音声訳者が図・表・写真などを読みとって自分の言葉で情報を伝えることになります。その場合、顔写真のように伝えにくいものもありますし、説明文が本文と同じになってしまうこともあります。又、時にはその分野の専門家でない音声訳者の説明で、却って本文の理解を妨げてしまうこともないとは云えません。図・表・写真などをこのような色々な事情で省略する時のコメントについて考えてみたいと思います。

1. 録音図書凡例で断る場合

凡例で“写真は省略します”と断ることは多く行われていますが、これだけのコメントではどのような写真があるのか、なぜ写真があるのかわからず不親切だと思います。そのあたりも考えてコメントの例をあげてみます。省略しない時のコメントも含めて参考にしてください。

○各章に執筆者の顔写真がありますが省略します。

○この本には、建物の全景、室内の様子など、32枚の写真がありますが録音図書（デイジー図書）では省略しています。

○本文中に30の図があります。説明が本文と重複する図は省略します。（又は、図のあるページとタイトルだけを読み込んでいます。）

○巻頭に5ページにわたって15枚の口絵カラー写真があります。この録音図書（デイジー図書）では本文中の関連のある箇所の説明します。

2. 本文中で断る場合

一冊の本の中で説明する図（表・写真）と説明しない図（表・写真）が混在している時には説明しない図の所で断ることになります。図が各ページにあるような時、続けて3つ、4つの図を説明しないような時は「説明は省略します」のコメントが続いてしまいます。聞き手としてはどうしても省略の多い本だという印象を持ってしまうことになります。

一冊の本の作り方を考えて凡例を上手に使うことが大切です。ここでもコメントの例をあげてみます。

○OAさんの部屋の見取り図ですが説明は本文と重複しますので省略します。

○図は以下の本文を流れ図にまとめたものです。説明は省略します。

ここまで読んで気がつかれたと思いますがコメントは少し丁寧に入れた方がいいということです。

あまり長いコメントも困りますが、聞き手を意識して納得してもらえるものにしたいものです。

つづく

(第2回)

漢字の理解

小原 二三夫(盲人情報文化センター点字製作)

ホームページ <http://www.5c.biglobe.ne.jp/Obara/>

私が墨字そのものに興味を持ち始めたのは、どういうきっかけだったのかはよく覚えていませんが、中学の初めころでした。毎朝始業前に、2年上の弱視の生徒に、黒板とチョークを使って(チョークで書いた跡はほんの微かに触って判りました)、初めは平仮名を教えてもらい、次になんとか自分の名前を書けるようにと練習しました(どちらも確実には覚えられず、中途半端に終わってしまいました)。その後、高校2、3年の国語の先生が語の「漢字構成」ということを強調しました。私は、語の意味がだいたい分かればそれで良いと思っていましたし、なによりも漢字そのものの具体的なイメージがまったく無いので、漢字一字一字の意味を考え、それをふくむ熟語を比較するといっても、実感としては宙をつかむといった感じでした。それでも、漢文の入門の所で、「書を読む(読書)」の例が点線を使った浮き出し文字でも書かれていて、とても印象的でした。私が漢字を実際に触ったのは、これが最初だったのです。

高校卒業後、私はある施設で生活訓練を受けましたが、その中に「墨字」の時間がありました。その授業の教材は、サーモフォーム(真空熱処理によって、原版に浮き出している形をそのまま正確にプラスチック性のシートにコピーする装置)で作られたいわゆる浮き出し文字でした。それはとても鮮明で、注意すれば線の上下の重なり具合も判別できるので、ある程度は書き順まで想像できました。これを手本にして、点線でくぎられたマス目

に一字一字鉛筆やペンで書いていくのです。初めは数字や平仮名、それから漢字へと移ってゆきました。漢字については、その字形ばかりでなく、その成り立ち(象形・指事・会意・形声文字)から部首まで、かなり詳しく教えてもらいました。幾人かの視覚経験のない訓練生は漢字に夢中になり、職員のほうは教材を準備するのに必死だったようです。私は半年余りで400字くらい覚えたと思います。そして十和田市の実家に2回ほど自筆で手紙を書きました。この手紙に母は涙して感激したということです。

横道にそれますが、母が私の手紙にとっても感激したのは、今から振り返ってみるとそれなりの理由があったように思います。母はじつは小学3年くらいまでしか学校に行かず、漢字の読み書きはほとんどできなかったようです。結婚後父に新聞や雑誌を少しは読めるようにと漢字を教えてもらい、拾い読みくらいはなんとかできるようになりました。中学から高校にかけて、私はよく母が新聞を拾い読みしている前後を推測でつなげてやっていました。母はとても感心し、またありがたがってました。そんな母でしたから、読み書きがままならないことの不自由さ、その大切さは実感していたはずですが、目の見えない私の書いた、ある程度判読できる手紙を見た時の母の感慨もうなずけるというものです。

では、本題にもどりましょう。

こうした形での漢字の修得は、しかし、私の場合これが限界でした。角数の多い漢字は

覚えるのがますます困難となり、他方、以前に覚えたはずの漢字を次々に忘れてしまうのです。覚えられる漢字数よりも忘れていく漢字数のほうが多くなりそうな状況になってきたのです。そうならざるをえない理由の一つは、教材以外に、私は漢字を使った文章をまったく見ることはできませんし、また自分の書いた漢字もまったく確認することができないからだと思います。要するに、書かれた文書を読み、また自分の書いた文書を確認するという、文字としての機能を欠いているのです。私の漢字学習は、漢字についての知識や感覚を養うという点ではすこしは効果があったでしょうが、文字そのものを覚えるということではまったく失敗に終わりました。それから1年もすると、残念ながらほとんどの漢字を忘れ去っていました。

その後 10年近く経って、これまたどういうきっかけだったのか忘れてしまいましたが、「漢点字」というものがあることを知りました。漢点字は、点字で漢字を表現する方法の一つで、1970年ころ、当時大阪府立盲学校の理科の教諭だった故川上泰一先生が発表したものです。漢点字は、表意文字としての漢字の性質が失われないよう、漢字を構成する部首をできるだけ点字に反映しようとしたものです。縦4点横2点の8点から成りますが、漢字の本体部分は下の6点で、1マスから3マス（多くは2マス）で漢字1字を表し、上の2点はその漢字の始めと終りを示すのに使います。

（点字で漢字を表す方法としては、この他に、筑波大学付属盲学校の先生だった長谷川貞夫師の考案した6点漢字があります。主に、音と訓の組み合わせを基本とするものです。）

当時川上先生は漢点字学習者のために通信教育を始めておられ、私もそれを受けました。1年弱で常用漢字を終え、その後は漢点字を使って点訳された本を読みながらその他の漢字を覚え、また漢字の使い方も勉強しました。そして、一般のワープロの普及に先だって、1982年ころには NECの PC6601で動作する、漢点字でしか入力できない簡易なワープロソフトを買い、自力でレジメなどを作り始めま

した。

最近では仮名漢字変換の精度が向上し、普通の文章ならわざわざ漢点字を使う必要はないともいえます。けれども、固有名詞や専門的な語、自分で造った言葉などを書く場合、変換モードでは候補になっている漢字から自分の思っている漢字を確実に選び分けるのはかなり難しい作業で、私の場合直接漢点字で入力したほうが安心です。という訳で、私は今でも漢点字でも入力できる特別なソフトを使い続けています。

では、考案者である川上先生の意図通り、漢点字は表意文字としての漢字の機能を実際に充分果たしているのでしょうか。結論から言えば、少くとも私の場合はそうだとは言えません。皆さんは知らない漢字に出会った時、その部首からその漢字の意味と読みについて、おおよその見当をつけることができるでしょう。しかし漢点字ではそんな風にはゆきません。漢点字では、その構成上の制約から、類似の数種の部首を一つで代表させたり、三つ以上の部首から成る漢字ではその中の二つだけの組み合わせにしたり、同じ点字パターンを避けるためいろいろ例外的な処置などしています。そのため、一部の単純な構成の漢字を除き、漢点字から正しく漢字の部首構成を推測することは至難の業です。ただし、これとは逆に、漢字からそれに対応する漢点字を推測することは可能です。私は、見える人に漢字の部首を説明してもらえば、しばしばそれに対応する漢点字を特定することができ、お互いのコミュニケーションにとっても役立っています。

私の場合、漢点字を完全とはいえないまでもマスターしたことで、漢字の理解はそれなりにできていると思いますが、その理解は、見える人が表意文字としての漢字で理解しているものと同じだという訳にはゆきません。

私にとって（おそらく多くの目の見えない人にとって、もしかすると目の見える人にとっても）漢字の理解はなお課題で有り続けるでしょう。

つづく

※この原稿はホームページからそのまま転載しています。

上手な家庭録音のすすめ

生活音を減らす

日常生活上の雑音としては、車の音や飛行機、電話の呼び出し音、冷蔵庫のモーター音、人の話し声などがあげられます。飛行機や電話などの音は録音中でもすぐに止めて録音をやり直すことになるでしょうが、冷蔵庫のモーター音などのように毎日聞いている雑音は、意外に気が付かずにそのまま録音している場合があります。

盲人情報文化センターの交差点には音のでる信号機が設置してあり、毎日鳴っているのですが、私たちの耳にはほとんど聞こえません。しかし、時々会場で録音した音を聞くと信号機の音がしっかり入っています。人間の耳にはまわりの音を適当に取捨選択しながら聞く能力があります。実際にまわりに雑音があっても必要な音を聞き分けることが出来るわけです。しかし、録音機にはそんなことはできません。すべてを録音してしまいます。音声訳者が unnecessary な雑音を出来るだけ録音しないように工夫する必要があります。

生活音をできるだけ入れない為には、録音する時に録音ボリュームを小さく絞れるように工夫します。その為には、マイクと口との距離や角度を十分注意する必要があります。マイクの種類も電池ありと電池なしでは感度がかなり違いますし、指向性と無指向性でも感度はかなり違ってきます。

マイクの距離は特に重要です。音は距離の二乗で反比例します。つまり、マイクと口の距離が半分になると音量は4倍になりますから、録音ボリュームを小さく絞ることができます。今までマイクを40センチ離して録音していた人が、20センチにして録音すると、音量は4倍になりますので、録音ボリュームをかなり小さく絞ることができます。ボリュームを絞ることができれば、まわりの生活音は相対的に小さくなり、音声がよりクリアーに録音されることになります。しかし、あまりマイクを近づけると、口を開く音や息を吸い込む音、顔が少しでも動くとも音量がおおきく変化してしまうといった問題も発生してきます。自分で一番適切な距離を確認していく必要があります。また、マイクとの距離は音量だけでなく、音質も変化します。近づくと音質は低音が強調されるようになり、ソフトな感じになりますが、離すと高音が強調され堅い感じになります。常に一定の距離・角度で録音しないと訂正の時に音が合わないということになります。

外の音が直接入らないようにするには、窓（遮音）やカーテン（吸音効果で、反響音を減らす）は閉めて録音しましょう。また、マイクが窓の方を向いていると外の音を拾う原因にもなります。マイクは指向性ですから、できる限り雑音を発生している方向には向けないように注意しましょう。

利用者から制作依頼を受けている原本

『地平線 光と影』並河 萬里 著 <地理>
『地下水 合同歌集』<詩歌>
『障害者はどう生きてきたか』 杉本章 著 <社会科学>
『エアラインハンドブックQ&A100』
全日空広報室 <運輸>
『デリシャス 6月号』世界文化社 <雑誌>
『ルー・ガルー 忌避すべき狼』京極夏彦 著 <小説>

以上のリストは、読者から音声訳の依頼を受けている本です。引き受けて頂ける方がありましたらご連絡ください。初めてのグループの方は何か5分でも結構ですから録音したものをご持参下さい。録音についてのチェックと共に、必要があれば録音技術のアドバイスをさせていただきます。

お知らせ

第6回 録音図書製作グループ音訳研究会のご案内

近畿視情協録音図書製作委員会では、公共図書館や点字図書館に所属し、実際に録音図書を製作しているグループを対象にした音訳研究会を下記の内容で予定しています。

研究会終了後、簡単なグループの交流・懇談も予定していますので、できるだけグループリーダーの参加をお願いします。

記

日時： 2001年11月8日(木) 1時～3時
場所： 盲人情報文化センター 9Fホール
〆切日： 2001年11月2日(金)
対象者： グループリーダーを含めて(2～3名)
内容： 1. パソコン関係用語の読み方研究
2. グループの交流・懇談
3. 次回の日程と内容の確認

※ この件につきましてお問い合わせは盲人情報文化センター
録音製作係の清水まで(電話 06-6441-0015)

デジ編集を始める (その4)

前号につづき、デジ編集を行うパソコンの初期設定について紹介する。

〔2.6 パソコンの初期設定〕のつづき

(2) スクリーンセーバーの解除

ディスプレイ上で画像の動きがない状態が一定の待ち時間以上続くと、画面の焼き付きを防止するため、3Dテキスト他の予め用意された動きのある画面すなわちスクリーンセーバーに切り替わるように設定するのが普通である。しかし、デジ編集ではビルドブックやCD書き込みなどの作業を行う場合、30分から長いときは1時間以上にわたって画像の動きがない状態が続くことがある。このような作業の途中でスクリーンセーバーに切り替わると、そのときに発生する信号がデータに悪影響を及ぼす恐れがあるので、スクリーンセーバーは動作しないように設定しておくのがよい。最近のディスプレイでは画面の焼き付きはさほど気にしなくともよいようである。

前号の(1)で開いた画面のプロパティで〔スクリーンセーバー〕タブをクリックして、プルダウンリストから「なし」を選択する。

(3) 省電力設定の解除

同じ理由から、作業の途中で省電力のためにモニタやハードディスクの電源が切れることがないようにしておくのがよい。

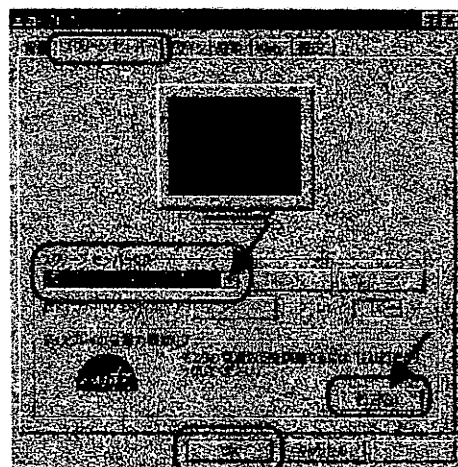
①上記の〔スクリーンセーバー〕設定画面の〔ディスプレイの省電力機能〕欄の〔設定〕ボタンをクリック

②〔電源の管理のプロパティ〕の〔電源設定〕タブ画面にある〔システムのスタンバイ〕、〔モニタの電源を切る〕、〔ハードディスクの電源を切る〕等の項目のプルダウンリストからいずれも「なし」を選択する

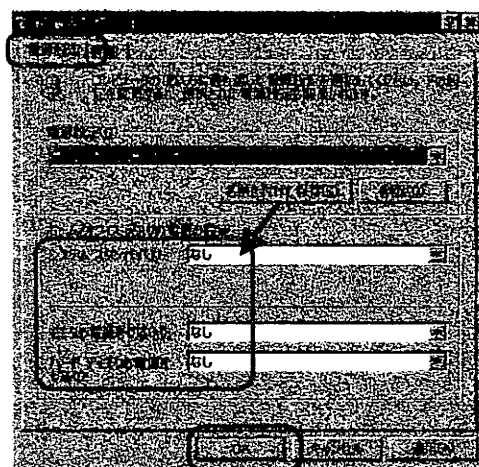
③〔電源の管理のプロパティ〕画面及び〔画面のプロパティ〕画面の〔OK〕ボタンをクリックして以上で行った設定を確定する。

(4) マウスのダブルクリック速度の設定

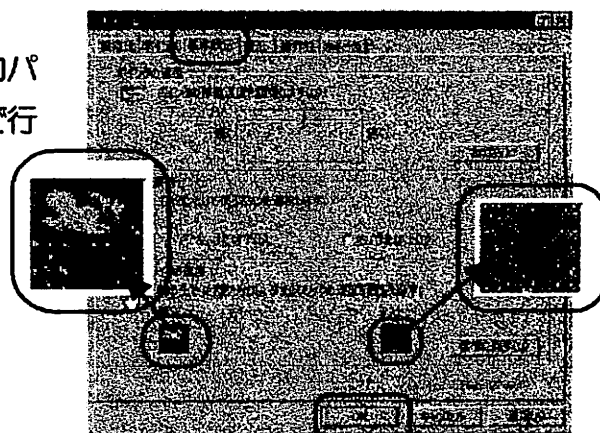
デジ編集ではダブルクリックが要求される場面が多い。最初に、初心者はダブルクリックで苦労する。ダブルクリックの間隔を比較的長く(ゆっくり)設定しておけば、それより早い分にはダブルクリックが有効になるので問題ない。



画面のプロパティ (スクリーンセーバー)



電源の管理のプロパティ (電源設定)



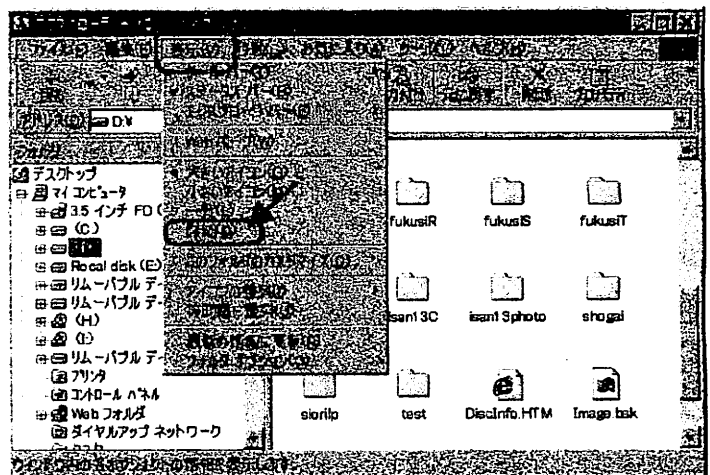
マウスのプロパティ (基本設定)

- ① [スタート] → [設定] → [コントロールパネル] をクリック
- ② [コントロールパネル] ウィンドウが開くので、その中の [マウス] マークのアイコンをダブルクリック
- ③ [マウスのプロパティ] 画面が開くので、[基本設定] タブをクリック
- ④画面左下の [雲マーク] の上にポインターを合わせて2回クリックして、ダブルクリックの速度を設定 (初心者はゆっくり2回クリックするとよい)
- ⑤設定が適切かどうかは、右下の [傘マーク] をダブルクリックして傘が開くかどうかをテストする
- ⑥ダブルクリック速度の設定が適切であることを確認したら [OK] ボタンをクリックして設定を確定する

(5) エクスプローラは詳細表示に

エクスプローラはホルダーやファイルまたその容量、作成期日などを確認したり、CD-R 書き込みを行うときなどに用いる。

ドライブを構成するホルダーやファイルはエクスプローラ画面の右欄に表示され、その表示方法を選択することができる。大きいアイコン表示は一つ一つのアイコンが大きい分一度に表示されるアイコンの数が少なく、ホルダーの数が多いときにはその全体像を把握するのに難がある。

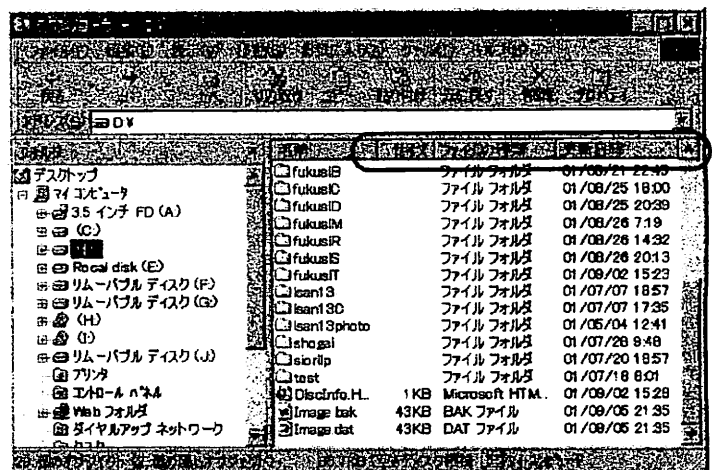


エクスプローラ画面 (大きいアイコン表示)

デジシー編集の結果作成されるプロジェクトホルダーはしばしばその容量や作成日時を確認する必要がある。エクスプローラの [表示] メニューから [詳細表示] を選択することにより、ドライブ (例: Dドライブ) を構成する [ファイルサイズ] や [更新日時] を知ることができる。

- ①エクスプローラの [表示] メニュー → [詳細] を選択

参考: エクスプローラは [スタート] → [プログラム] から立ち上げることもできるが、頻繁に使うものなのでエクスプローラ画面で C ドライブの WINDOWS ホルダーの中にある Explorer アイコンを選択し、[ファイル] → [ショートカットの作成] をクリックしてショートカットアイコンを作成し、さらにそれをデスクトップにドラッグしておくとう便利である。



エクスプローラ画面 (詳細表示)

(つづく)

(テーブルライブラリーにしのみや 鳥生次郎)